

未来^眼とうほく 第11回

当事者意識を持って時代の変化に対応する

現在も発刊している新聞社として東北地方で最古、全国でも4番目に古い歴史を持つ秋田魁新報。2009年に代表取締役社長に就任した小笠原直樹氏は、同紙の編集局長、論説委員長も務めた論客である。今回の対談では、秋田魁新報の歩みとともに、新聞記者としての長い経験から、秋田県、東北地方、そして日本といったスケールで、産業、地方分権、文化など幅広い分野について、現状と課題、今後のあるべき姿をうかがった。

社是が意味するもの

●町田 社長室にお招きいただいて、最初に目についたのが、社是が書かれた屏風でございます。「踏正勿懼（せいをふんでおそるるなかれ）」と「文章報国」。この2つの言葉に込められた新聞社としての思いはどのようなものなのでしょうか。

●小笠原 大きく3つの柱があります。1つは、地域にとって必要十分な情報をきちんと提供できているか。2つ目は、地域住民の多様な意見をしっかりと取り上げて、それらの意見が交流する場になっているか。3つ目は、権力の乱用や横暴などをきちんとチェックできているか。これらが、私どもの使命・役割だと考えていますし、社是の意味するところです。

●町田 大変すばらしい理念だと思います。ある種の社会正義が感じられます。

●小笠原 明治期は自由民権運動が盛んな一方、言論抑制や官憲弾圧で発行停止になった新聞が日本中に数多くありました。それでも、翌日は題字を変えて別の新聞名で発行する反骨精神がありました。当社でも、記事の取り消しをめぐって、軍部から本社社屋に機関銃で空砲を撃たれても屈しなかった歴史があります。

●町田 そうした伝統を踏まえつつ、かつ絶えず新しさも追求されていますね。県内での世帯普及率が東北の地方紙では最も高いとうかがいました。私どもも秋田県民にとって大変誇らしい地方紙だと思います。

●小笠原 ありがとうございます。新聞業界もデジタル化が進み、対応に苦慮しているところですが、社是に恥じることなく、今後も紙面作りに取り組んでいくつもりです。

自然の恵みを生かした産業振興を

●町田 秋田県といえば、全国有数の農業県です。ところが、2010年の統計を見ますと、食料自給率は北海道に次いで全国2位なのに、農業生産額は全国20位、東北では最低です。何が問題なのでしょう。

●小笠原 米への依存度が極端に高いということだと思います。あるレポートによると、農業の中では稲作が最も時間効率が低いようです。しかし、日本の米価が低迷傾向にある中で、農業の中心が稲作であることは、むしろマイナス要因になりかねません。それから、米を含めた県内の農作物を、これまでほとんど加工しないで出荷してきたことにも問題があります。「6次産業」という言葉がありますが、農作物を加工して付加価値を付け、さらに販売まで行えば、農家の収入は

もっと増えると思います。

●町田 そうですね。そのためには、農業に専念する人がもっと増えなければならないと思います。兼業農家が増え、その中でも農業所得を従とする第2種兼業農家が増えていく現状では、秋田県の農業がどんどん衰退していくのではと懸念されます。一方で、田畑を集約した大規模農業経営の可能性も考えていく必要があります。大規模農業が盛んな北海道では、1,000万円以上の稼ぎ高がある専業農家も少なくありません。

●小笠原 同感ですね。やはり農業を構造的に変えていかなければならない。その意味で、北都銀行が中心になって立ち上げた「あきた食彩プロデュース」は大いに注目されます。農業を6次産業化していこうという試みは、大きな変化の兆しだと思います。ぜひ成功事例を積み上げて、秋田県の農業を変えていくきっかけになってほしいと期待しています。

●町田 ありがとうございます。農業への充実した保護政策が、皮肉にも、農業に携わる方々をやや受け身的にしてしまった気がいたします。これからはそうではなく、“挑戦する”という気概を持って農業に取り組むと、違った未来像が見えてくるかと思っています。

●小笠原 農業に限らず、森林資源や鉱物資源、風力など、秋田県には自然の恵みが豊富にありますので、これを生かした産業振興を図っていく必要があります。そして、若い人がどんどん参入して、鋭い経営感覚や、時代を読み取る力を発揮する。そうした環境を整備していかなければならないと思います。

●町田 おっしゃる通りです。私は東北公益文科大学の学長も兼務しておりますが、若者の可能性は無限大だと感じております。

地方分権に必要なのは当事者意識

●町田 東京一極集中が限界を迎え、今後は地方分権がますます重要となってきますが、貴紙をはじめとする地方紙としては、これから地方分権がどう展開していくのかということと大きく関わってくると思います。

●小笠原 そうですね。やはりこれからは地方が主体になっていかないと、日本全体が輝きを取り戻せないでしょう。地域がいかに主体性を持って経営していけるかということが、21世紀の地域づくりのポイントだと思います。問題は、地域の特徴をどう出していくかです。そのための合意形成が、実は大変難しいと思います。

●町田 そこは、非常に知恵を要するところです。やはり、現場を最もよく知る地方が、もっと現実的な問題提起をしていく必要があると思います。そのために

は、行政のみならず、われわれ民間も力を合わせていくことが重要だと感じています。

●小笠原 そのためには、3つの意識が必要だと思います。問題意識と、危機意識と、そして当事者意識です。秋田県だけでなく、地方はみんな問題意識と危機意識は十分持っていると思います。ただ、どうも当事者意識が欠けているのではないかという懸念がぬぐえません。時代の変化に対応していくには、自分たちでやらないとどうにもならないという、強い当事者意識を持たなければと考えます。

●町田 東日本大震災というあれだけの不幸な災害があっても、復旧すらままならないというのは、もちろん国に大きな責任があります。しかし、誤解を恐れず言えば、被災地である地方の側にも、当事者意識に欠けるところがあるのではないかという気もいたします。

●小笠原 国だけを批判しても仕方がありません。地方の側でも、自分たちがどう関わって、どういうグループをつくり上げて、何をやるのかを考えることが重要だと思います。私たち新聞社も、とすれば批判や批評で終わってしまうところがありますので、自戒も込めて申し上げたいところです。

行政区域は線にすぎない

●町田 地方分権ということを考える場合、基本的には東北が一つとなって、さまざまなことに取り組んでいく必要があると思っています。秋田県だけでなく東



小笠原直樹（おがさわら・なおき）

1951年横手市生まれ。中央大学法学部卒業後、1975年に秋田魁新報社入社。湯沢支局長、社会部長、論説副委員長、取締役編集局長、論説委員長（取締役編集局長と兼任）、常務取締役編集局長（論説、経営デジタル戦略、印刷担当）を経て、2009年に代表取締役社長就任。日本新聞協会理事、東北経済連合会理事、秋田県書道連盟会長、秋田県交通安全協会会長などを務める。



町田 睿（まちだ・さとる）

1938年秋田県生まれ。東京大学法学部卒業後、富士銀行に入行。同行取締役総合企画部長、常務取締役を経て、1994年荘内銀行取締役副頭取、95年取締役頭取、2008年取締役会議長を歴任。09年10月よりフィデア・ホールディングス取締役会議長、北都銀行取締役会長、11年6月より荘内銀行取締役相談役、12年4月より東北公益文科大学学長、同年6月よりフィデア総合研究所理事長をそれぞれ務める。



社長室に置かれた社是の屏風。かつては原稿用紙にこの社是がしるされ、記者は襟を正して向かったという。(撮影：フィデア総合研究所)

北全体の強みとしても、先ほど社長が言われたように、他の地方にはない自然の恵みが数多くあります。これをどう生かすかが、非常に大きなテーマだと思います。また、それに対して前向きに挑戦していくという気構えが、これからの東北には強く求められると感じております。

●小笠原 私もそう思います。特に、東日本大震災以降、東北が一体となって連携し、物事に取り組むことは、大変重要であり、必要不可欠なことと認識しております。みんなが東北の可能性を認識し合って、21世紀、さらには22世紀の東北の地域づくりを位置付けていく必要があります。行政区域というのは“地図上の線”にすぎません。

●町田 全く同感です。東北全体を視野に入れた発想を、われわれはもっと強く持つべきだと思います。また、海外に目を向けた場合、東北はロシア、中国、韓国に近く、環日本海交流においても一体となって考えていく必要があるでしょう。

●小笠原 当然のご発想だと思います。日本海対岸国との交流の促進は東北だけではなく、日本にとっても大変重要なポイントです。領土問題でやや緊張した部分はありますが、外交当局は将棋を打つ人が何手も先を読むように、いろいろな場合を想定して思慮深く行

動してほしいものです。

●町田 物流だけでなく、人間同士が交流して信頼関係を築いていけば、良い方向に進むと信じています。そのためにも、東北地方に求められる役割は大きいと思います。

●小笠原 おっしゃる通りですね。

教育県・秋田の強みで産学官連携を推進

●町田 連携に関していえば、産学官連携も重要な問題です。グローバル経済において、生産拠点としての日本の競争力は弱まっていますから、これからは新しい付加価値を生み出す研究開発を推進しなければ、日本は国際社会で太刀打ちできません。そのためにも、産学官連携は必要不可欠だと思います。

●小笠原 とりわけ東北は、震災復興という大きなテーマがあります。東北のような季節のめりはりが利いた地域に研究機関を設置すれば、研究者もいろいろな発想が出てくるのではないのでしょうか。今はインターネットが発達して遠距離でもコミュニケーションがとれますから、国などの研究機関をもっと地方に分散させることも検討されるべきです。

●町田 秋田県に関していえば、秋田県立大学では、地域の課題や地場産業などを意識した研究に力を入れており、大変評価できます。秋田大学の工学資源学部も、日本唯一の官立鉱山専門学校である旧制秋田鉱専以来の伝統があり、重要な研究機関です。また、最近では国際教養大学が全国的な評価を高めています。その意味で、教育県としての可能性は非常に高いと感じますし、民間や行政と力を合わせていけば、相当な力を発揮できるのではないかと期待を持っています。

●小笠原 私も大いに期待しています。秋田県は高等教育機関が充実している県の1つだと思います。秋田大学では現在、改組で国際資源学部を新設する動きがあります。1910年に設立され、100有余年の歴史を持つ鉱山専門学校の伝統を受け継ぎつつ、グローバルな視点で研究を行う目的で設立されるものであり、時代のニーズに合った取り組みだと思います。

●町田 そうですね。秋田県は小中学生の学力も全国トップクラスです。産学官連携の下、秋田県で優秀な人材が活躍し、地域が発展することを願っています。

文化は豊かさの象徴

●町田 視点を変えて、文化の話をしていただきたいと思います。私自身、文化が発達している地域ほど豊かな地域であるという実感を持っています。貴社で

は、新聞発行のほかに、さまざまな文化振興活動にも取り組まれています。その辺りの活動内容について、教えていただけますでしょうか。

●小笠原 議長がおっしゃる通り、文化は豊かさの象徴であるという考えから、当社では古くから文化振興に取り組んできました。1926年に全県俳句大会、29年に、今の秋田県美術展覧会の前身となる秋田美術展、35年に秋田書道展、37年には全県短歌大会をそれぞれ始めました。これらは現在でも続けられています。書道については、秋田県書道連盟の会長を代々当社の社長が務めています。2010年からは、当社と秋田県書道連盟、秋田県立武道館の3者主催で「秋田県新春書初め席書大会」を始めました。県立武道館に500人以上が集まる大きな大会です。スポーツでは、1927年から全県少年野球大会を主催しています。

●町田 秋田県は「スポーツ立県あきた」を宣言してスポーツ振興にも力を入れていますね。

●小笠原 しかし、競技スポーツで1番になればいいというわけではありません。いかに県民がスポーツを楽しめるか、その土台づくりをしっかりと行うことがスポーツ立県のベースには必要です。そうした環境を整備することで、結果として素晴らしい選手や優れた指導者が育つと考えています。

●町田 秋田県には民俗芸能も多種多様なものがあります。これらをどのように守り育てていくかも重要です。

●小笠原 秋田県では少子高齢化と人口減少が続いていますから、中山間部では過疎がさらに過疎を招く傾向があります。その中で、消滅していくにはあまりにももったいない文化が数多くあります。それらをこの先、どう受け継いで継承していくかということも、秋田県が抱える1つの大きな課題だと思います。

●町田 秋田県が物心両面で豊かであり続けるためにも、文化の灯を消してはいけません。

ラテン系の秋田県民

●町田 最後に、長年新聞づくりに携わってこられたご経験から、秋田の県民性をどのように感じておられるか、お聞かせいただきたいです。

●小笠原 少しおっとりとしていて、争いを好まないところがあると思います。それは、競争社会においては時としてマイナスの面もあるかもしれません。しか



秋田県立武道館で1月6日に開催された「第4回秋田県新春書初め席書大会」の1コマ。県内作家の文芸作品の揮毫、武道や生け花など日本の伝統文化の実演も繰り広げられる。提供：秋田魁新報社

し、私はむしろ、秋田県民が持つ優しさや温かさに裏打ちされた、良い性格だと考えています。また、他人への気づかひもよくできる県民だと思っています。

●町田 日本は現在、国を挙げて観光振興に力を入れています。秋田県民の持つ優しさや温かさは、重要な“観光資源”ではないでしょうか。

●小笠原 秋田県民はPR下手だとよく言われますが、気質はホスピタリティに満ちて、外から来た人をもてなす心が十分にあります。秋田県には自然や歴史、文化など、優れた観光資源がたくさんあります。そうした観光資源と、議長がおっしゃるように、秋田県民の性格をうまく融合させる工夫がなされれば、秋田県の観光はもっと伸びると思います。

●町田 陽気な県民性ともいえますね。山形県内の旅館の方から、秋田県のお客さんは、飲んで歌ってたくさんお金を使ってくれるから、大変ありがたいという話を聞きます。秋田県民は、今のように景気が悪くてもお金を使う楽天的な気質があるのかもしれませんが。

●小笠原 そうかもしれません。秋田県民はお酒をたくさん飲みますから。最新の国税庁の統計を見ると、成人1人当たりの日本酒消費量は、秋田県は新潟県に次いで全国2位、ビールや焼酎なども含めた酒類全体の消費量でも全国5位だそうです。ホスピタリティがあって陽気なところが、“東北のラテン”といわれるゆえんかもしれませんね。

●町田 今回の対談では、記者としてのご経歴の長い社長の鋭い観察眼から、大変興味深く、また将来を見すえたお話をうかがうことができました。どうもありがとうございました。